

四、就職の運動をしなかつたこと。

五、維新後藩廳出仕中侃諤の辨を振ひ上士有力者の感情を害せしこと。

イ、第二流第三流の地位に居る者が鰻上りに昇進し物質的に成功する處世の秘訣は「侃諤の辨をふるひ自説を言ひはり上長の感情を損はざることを」其當時の流行語を以て云へば「理屈を云はぬこと」であつた。然るに大石は此明哲保身の「モットー」を守らず侃々諤々文武一切の問題に口を出し自説を主張し上長の感情を損ふことを顧みなかつた。

ロ、大石は何故に侃諤の辨をふるへるか。夫れは彼れの土佐勤王黨に於ける地位即ち彼が土佐勤王黨の第一番の發起人たることが彼をして斯る心理状態に陥らしめたものである。彼は土佐勤王黨の第一番の發起人である。土佐勤王黨の爲に第一番に命を棄ねばならぬ者は彼である。然るに其彼が死せずして彼に勤められて土佐勤王黨を組織した瑞山や滄浪や隈山や坂龍や中愼や安覺が却つて悲壯の最期を遂げて仕舞つた。王政の愈復古するや大石は大業の成就を喜ぶと共に「武市等にも之を見せ度かつた」と絶えず考へた。美文的口調を用ゆれば「彼れの眼の前には土佐勤王黨の共同創立者にして身を殺して仁をなせる武市瑞山の鮮血淋漓たる死姿が絶えずちら付いて居る。彼れのうたゝ寝の夢には其昔し瑞山坂龍と火鉢を圍んで鼎坐せし時の光景が絶えず現はれる」と云ふのが彼れの心理状態であつた。瑞山の死姿のちら付く毎に鼎坐の光景の現はれる毎に「土佐勤王黨の最初の發起人は自分である。瑞山も坂龍も滄浪も安覺も皆悲壯の最期を遂げて仕舞つた。最初の發起人たる自分が此等同志の悲壯なる最期を見乍ら一身の榮華をむさぼつてよいものか。一身の安寧榮達を計つてよいものか。瑞山の志を繼いで國家の

爲めに盡すは我任務である我責任である。我は一點の利己心を抱いてはならぬ。國事を双肩に引受けて最善の努力をなさねばならぬ」と絶えず考へた。此心理状態此責任觀が彼れをして二流人物の處世上絶對禁物たる侃々諤々の辨を上司に向つて絶えず振はしむる原因となつた。

ハ、「瑞山に對してすまぬ」と言ふ彼れの責任觀はよい。其侃々諤々の動機は何人も之に對して同情を禁しない。乍然結果より之を見れば彼は結局「天下を背負つて立てるものは板垣に非らず谷に非らず我なり」と言ふ誇大妄想狂に懸つたと同様である。瑞山滄浪等輕格志士の運動に對して何等の理解を有せざる上士出身者（一例としては谷干城三〇年八月二七日日記を見よ）は大石の此心理状態を推察することが出來ず大石の此態度に對して好感を持たなかつた。

（評）大石を首領と仰げる舊瑞山派は頑迷固陋でなかつたか谷干城は○村○○を頑迷固陋と評して居るでないか。

（駁）瑞山未輩中には頑迷の徒も多少交て居つた。乍然頑迷の徒と共に反政府的行動を執つたから必らずしも悉く頑迷であるとは云ひ得ない。江藤新平は急進主義島義勇は保守主義であつたが首を並べて獄門にかゝつた。前原一誠と神風連は共に兵を擧げたが其政見は全く違て居つた。反政府運動は不平士族の仕業と評するものもあれど佐賀の山中一郎香月經五郎は洋行歸り村田新八も洋行歸りであり篠原國幹は京濱鐵道開通第一日汽車に乗つた。保守黨と云はるゝ土佐の國民黨にも片岡直温の如き人物が加つて居た。新道の工事や浦戸港改築には保守主義の國民黨が賛成して進歩主義の自由黨が反對した。由來人間は感情の動物である。政府に可愛がらるゝ連中は政府に味方し繼兒扱をされた連中は互に同情相合して政府に反抗した。頑固な連中

と事を共にしたとて必ずしも頑固と云ふことは出来ない。明治元年五月秋澤清吉歸國の際にも同年十月東征軍凱旋の際にも外國船を雇入利用した。保成峠に關する東征記の記事には何百「ヤード」の距離云々の文字が使つてある。此等の事實に徴しても大石が頑迷固陋でなかつたや明かである。○村○○と大石とは人物が全然違つて居る。

大石の就職は明治三年末迄にて其後は文武何れにも出仕しなかつた。總じて逆境に陥ると最初は自己の利害榮達を少しも意に介しなかつた人でも知らず知らず不平の念を生じ或は當局の施設に對して不滿の感を抱き或は自己と同一境遇に在る不遇兒等に同情したりする様になる。大石の中央政府に出仕せざりし理由明ならず從て明治三年以後彼が如何なる考を以て居たかこれ亦明ならざるも彼が其舊知にして長州に隠棲せる前原一誠の許に池知退藏等を遣したる矢張り同一の心理的現象に基いたものかも知れない。明治十一年富永有隣隱疵（谷干城遺稿下卷四五〇頁參照）の嫌疑を以て伊豫松山の獄に繋るゝこと約半年結局證據不充分の廉を以て無罪放免となれるや彼は最早國事を斷念し爾後全然隱退的生活を送ることとなつた。大石は萬葉風の和歌が巧みであつた。

東征軍奥羽より東京に歸り隊長軍監御前に召され侍從其氏名を呼上げ謁を賜るや其光榮に感激して

久方の天つ御空にけふはしも塵の身の名の聞へ上げつも

明治十一年嫌疑のはれて出獄の際

今日こそは脱ぎ捨てたれや玉櫛笥二名の島の浪の濡衣

月前 水 鷄

月夜よみ友や來つると出て見れば門田に叩く水鷄なりけり

一月二十四日清水寺雪

故郷の人に見せばや梓弓音羽の山の雪のあしたを

大正九年板垣退助病死した。死するに及んで世襲の爵記を弊履の如くなげ棄てた。残るものは其文武の大功と其不朽の名聲のみとなつた。

平家滅亡後義経も範頼も義盛も重忠も頼朝や北條の爲めに悲惨の最期を遂げて仕舞つた。蜀の亡ぶるや鐘會も鄧艾も再び許昌に歸らなかつた。明治維新後に於ても誠に悲しむ可き現象があらはれた。薩にては西郷隆盛が逆賊の汚名を帯びて岩崎谷の露と消へた。長にては前原一誠が身首處を異にせるのみか廣澤眞臣の暗殺に關しても忌はしき噂が傳はつて居る。土佐にては板垣後藤佐々木の三頭首間に於て斯る嘆す可き現象が生じなかつた。其代はり割腹抵當軍上士系の筆頭とも云ふ可き谷干城が將さに葬られんとするの危急に頻したり武市系の筆頭と云ふ可き大石彌太郎が「陋卷に窮死」したりした。

大石は何故に「陋卷に窮死」せるや谷は何故に板垣と不和となるや人事の複雑なる容易に其眞因を究め得ない。其眞因を究むるは誠に至難なるも外部に現はれたる形跡のみより評すれば頼朝獨り榮えて範頼義経共に家兄の無情に泣くの恨みがないでもない。

乍然板垣の後半生も亦決して物質的に幸福と云へなかつた。彼れは物質的幸不幸に目もくれず野に立つて自由民権の大義を天下に鼓吹絶叫した。而かのみならず一代華族論を提唱し其魁として伯爵

の榮稱を弊履の如く放棄した。假令割腹抵當軍幹部の多數が不遇に終つたとしても假令瑞山系從軍者の全部が失意に終つたとしても此高潔なる彼れの心事に對して最早「一將功成つて萬骨枯る」の怨言を並ぶるものは一人もあるまい。

跋 辭

○土佐下士勤王黨の首領武市半兵太切腹後其殘黨の一部は脱藩し一部は土佐に止りて時期の到來を待つて居た。此在藩武市黨は中岡慎太郎の斡旋により上士の板垣退助、谷干城等と妥協し迅衝隊即ち割腹抵當軍を組織し薩長討幕運動に加つた。此割腹抵當軍は東山道より甲斐に入り近藤勇と甲府を奪ひ合ひ勝沼にて近藤を破り流山にて之を捕へ且つ之を訊問した。本書は此甲府争奪と流山事件を中心とし近藤勇、土方歳三及び割腹抵當軍武市系四大領袖にして且つ此兩中心事件と密接の關係を有する安岡亮太郎、安岡覺之助、秋澤清吉(せいきち)大石彌太郎の六人を第一主人公とし

近藤と關係を有する伊東甲子(かし)太郎、大崎莊助

此兩中心事件と關係を有する美正貫一郎、武市熊吉、別役成義、上田楠次

土佐側第一主人公と親戚關係又は特別關係を有する多田哲馬、吉井顯藏、桑原介馬、安岡嘉助
池知(いけち)退藏、宇賀喜久馬

武市半兵太、坂本龍馬、中岡慎太郎

割腹抵當軍上士領袖の板垣退助、谷干城、片岡健吉、土屋可成

を第二主人公とし第一主人公は其公的生活の全部を略叙し第二主人公は其面白き逸話又は其悲壯なる死狀又は其最も顯著なる一事蹟のみを略叙し且つ此第一第二主人公と關係を有せる事件を叙述せ

るものである。

○本書の記事は左に又は本文に「眞偽不明」又は「こう云ふ工合に潤色した」と特に斷つてない限り一字一句悉く事實である。尤も此「事實と一寸も違て居ない」と云ふのは「誰が誰に斬られた」とか「何處をどう云ふ工合に斬られた」とか云ふ事實に關する記事が違て居ないと云ふだけにて「大石は何故に不遇に終つた」と云ふ如き議論に關する記事は此限りでない。議論に關する記事は筆者一人の想像に止まり其議論の當否は人によつて夫々意見を異にすることと思ふ。

○本書は東征記維新土佐勤王黨史、谷干城遺稿、鯨海醉候、板垣退助君傳、伴儻坂本龍馬、武市瑞山關係文書、坂本龍馬關係文書、土佐偉人傳、戊辰戰史、防長回天史、西南紀傳、明治政史、明治史要、大政官日誌、維新史料編纂局文書、會津鶴ヶ城の血戰、白虎隊、幕末實戰史、館林一番隊史近藤勇、新選組始末記、新選組史、赤坂喰違事變、新聞記事、探偵物語、大石圓翁傳、山北兩烈士大警視川路利良君傳、大西郷秘史、薩南血淚史、吉田數馬、河野磐州傳、林有造舊夢談等より材料を取つた。上記書籍及び日本歴史維新歴史に關する世間周知の書籍に出て居ることは一々左に其出所を掲げてない。但し筆者自身眞偽不明と思つた事項は叙上の書籍の記事にても一々其旨を左に掲ぐ。

○眞偽不明の記事潤色せる記事前記以外の材料によれる記事を逐條的に左に掲ぐ。
第一、坂本龍馬のほら

三人同宿は武市瑞山關係文書上二〇頁を見よ。

別役云々は別役の直話多田云々は多田三五郎夫人直話双方共「何をぬかすか」だけが筆者の書

き加へ。「半分誠半分うそと思へ」は至つて眞面目な態度で話した由

「本書に掲げた様な話はほらと云へぬ。坂本は俗に所謂大風呂敷を擴げた。夫が即ち坂本のほらだ」と云ふ方があるかも知れぬ。嚴格に云へば其通りであり其大風呂敷の實例も判て居れど夫を掲げて面白くないと思ふ。

第四、大和の義舉

中山忠光の逸話は對中山侯爵家關係上出所を秘す。

「大石團藏踊り出」より「石橋の下に這込んだ」迄眞偽不明

多田の話は多田家の傳説

第七、九門の戰

萬々街道と龍串は小高坂竹内某直話

第九、武市瑞山の切腹

「けふは御苦勞」は小笠原忠五郎が拙宅にての話。「御互に困つた」は西山志澄の演説

第一〇、板垣退助の騒起

桑原の話は安岡良亮令息秀夫君の直話。武市との仕合は秀夫君幼時桑原未亡人（良亮の令妹）より聞けるもの

第一四、近藤勇墨染の遭難

伊東の死狀は「結城無二三」と云ふ書籍と相違し孰れが正しきや不明

第一六、板垣退助の出陣

瑞山系三十人は京都より加つた人も後援隊として出陣した人も故意に書き加へた。本書に漏れたる血判狀署名從軍者御存の方は御一報を乞ふ。武市熊吉、徳久時治、中屋修治、渡邊三郎、近藤楠馬等は省いた。

大石秋澤出會馬立降雪下横目付添は秋澤日記による。

第一七、甲府の爭奪

大石圓翁傳に掲ぐる大石の覺書と秋澤の日記による。物凄しい顔は實父が實兄に話した。

第一八、勝沼の戰

「大崎が近藤を諫めた」は鹿島淑男君著近藤勇により「首が回つた」は板垣退助君傳による。共に眞偽不明

第一九、近藤勇の最期

近藤の辯解は鬼怏と云へない。石田三成、江藤新平、皆同一の態度を取つた。

第二〇、吉井行二の敵討

「坊さん上手に斬つて下さい」は事實である。慶應戊辰小田原戰役史中の宇賀行三談にも出て居り小生等も少時より聞て居る。

木の上の見物は實母の談

淡中の逸話は新作夫人の姪細大鹿子の直話

第二一、山内容堂の逸話

心學教師の話は徳川榮華物語より抄出す眞偽不明。間崎の話は大岡小異。板垣が大政返上を罵

つたは「滿坐の前」か「單身容堂に謁して」か不明。自慢話云々も眞偽不明。

第二二、安塚の戦

脱兵隊が三隊に分れて市川より宇都宮に赴ける際土方が三隊の何れに居たか不明。安塚出陣か宇都宮留守か不明。大島と共に六方越を退却したか足趾負傷の爲め數日前今市より田島に退却せるか不明。

第二三、板垣退助の北進第二四會津の落城

右兩篇は東征記板垣退助君傳谷干城遺稿戊辰戦史等公刊書籍のみによつた前記四書に大石安覺安亮秋澤桑原池知六氏の名を掲げてある戦争を掲げた。但し四書に六氏の名を掲げてあつても餘りに面白くない事柄(負傷者護送の如き)は之を省略した。公平に之を省略した。

六氏の名の右四書に出て居ない日の戦争でも大局に關係のある戦争は之を掲げたが大局無關係の戦争は假令六氏の一人が居たことが明に想像されて居ても右四書に六氏の名の書いてない以上之を省いた。従て六氏が加つて居て本書に書いてない戦争が數多ある。

安覺死状中「長軍に相圖」云々は安亮が長子雄吉君に雄吉君が弟秀夫君に秀夫君が筆者に語れるもの「耳の後に命中」云々は安覺の従弟にして安覺家現戸主安岡正熙君の實兄たる藤田龜之助君(七十一歳)の話による。但し安岡喜太郎君(六十三歳)は「咽喉笛の直ぐ下の少し引込んだ所を貫通した」と云ふて居られる。「身體の側面を敵に向」は筆者の想像「ぬび上つて」は安岡秀夫君の話。尙ほ安覺従兄の令嬢にして安覺従弟の未亡人たる安岡房子様の御手紙によると「安覺は身長五尺二寸位やせぎすな固い體で見かけも可愛らしい人で」あつた由。藤田龜之助君の

話と安岡喜太郎君の話は房子様令息安岡秀彦君より筆者に通知して下された。

殉難婦人辭世の眞偽は吊靈義會へ御問合を乞ふ。

第二六、門閥打破の失敗

井口又傷中間答の文句と下緒の話は「汗血千里之駒」より轉載眞偽不明。板垣伯が當時門閥を重じたか否は谷干城遺稿や「明治天皇と臣高行」等を見よ

第二七、武官の不遇

中村重遠は安塚今市の戦に従軍其當時は隊長でも軍監でもない。其後宿毛二小隊と共に北越に轉戦した。北越軍には岩村兄弟片岡利和が居た故或は此人々の推薦で當時北越軍參謀たりし山縣有朋に直接交渉本省に出仕し他の五氏とは叙任の日も違つて居るかも知れぬ。

輕格や維新前後輕格より上士に拔擢された人は明治四年任官の際(土藩や板垣や谷の推薦にての意味)一人も佐官にならなかつたと別役成義氏が筆者に確かに語つた。

第二八、岩倉右大臣の遭難

武市の維新後の官歴は武市の口供書(福島成行先生著「赤坂喰違事變」一三七頁を見よ)に「自分儀明治四年十二月御用召にて出京正院(大政官)に出仕明治五年八月依頼免官引續き外務省十等出仕拜命六年十一月依頼免官」とある通りと信ず。

第二九、神風連の騒起

與倉中佐垣の根より這出云々は眞偽不明。

第三〇、西郷舉兵の原因

勤王黨史を見よ

別々に戦云々は古老の談尙ほ林有造奮夢談及び谷干城遺稿下卷四六二頁を見よ。
第三一、自由國民の黨争

植木の話は問答體に直した。片岡宮地問答は故山脇貞信君談眞偽不明
第三二、熊本籠城の状況

別役の直話と籠城將校の談片及び維新史料編纂局調による。池邊使囑放火云々は當時の風説
○本書は公人に對しては一切敬稱を省き私人に對しては之を付した。

○安覺、安亮、秋澤、大石は互に性質も系統も違て居た。安覺、大石は香長系郷士安亮は幡多卿士
秋澤は高知近郊輕格にて元來は大石池知よりも尾崎、北代、土方、南部、曾和と親しく片岡林より
も山地北村と親しく桐野別府よりも野津西寛四郎と親しかつた。
○今市滞陣中安岡亮太郎は使命を帶て東京に赴ゐた。

昭和四年五月一日印刷
昭和四年五月五日發行

高知縣土佐郡倉村甲千三百二十五番地

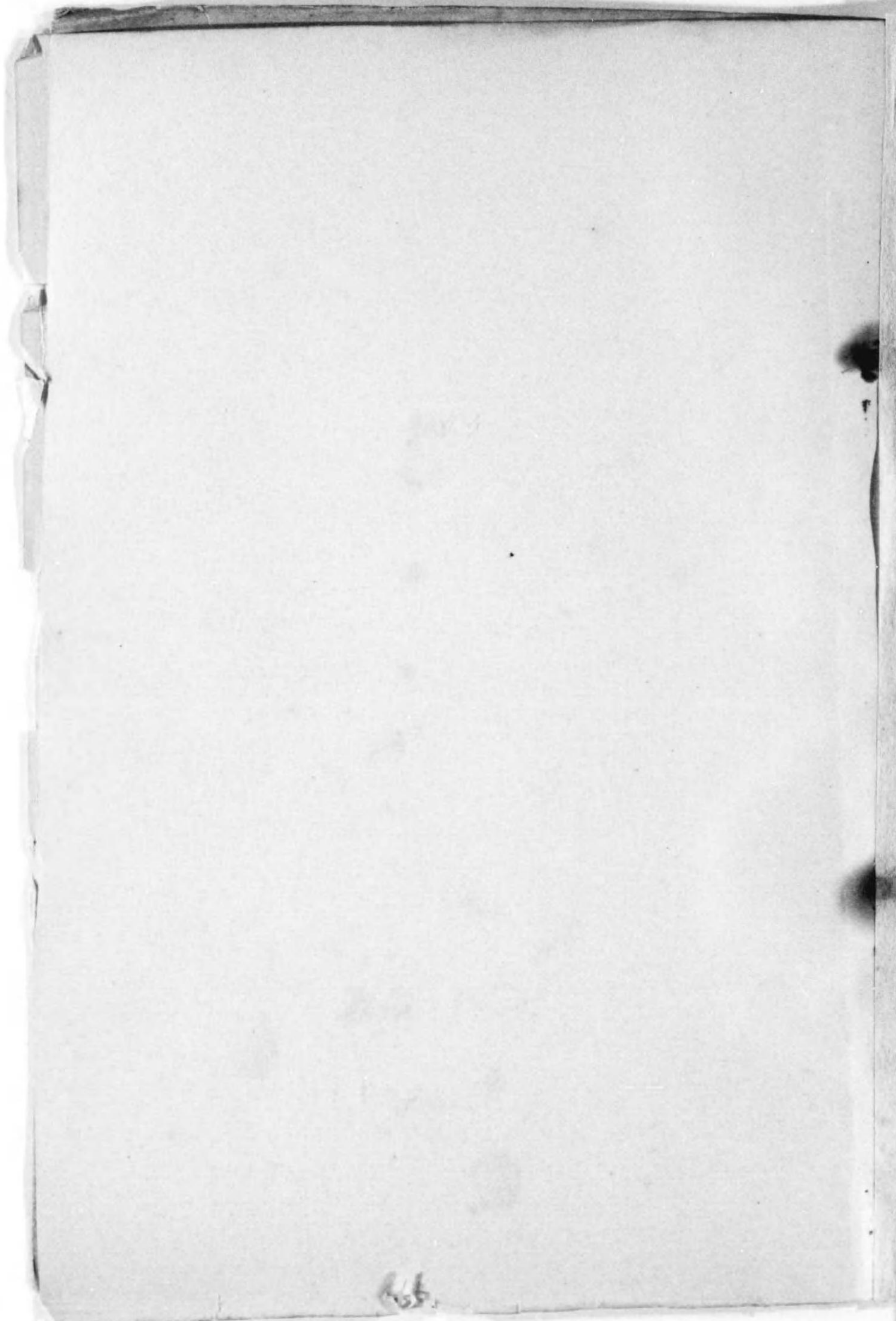
發行者 伊野部勝作



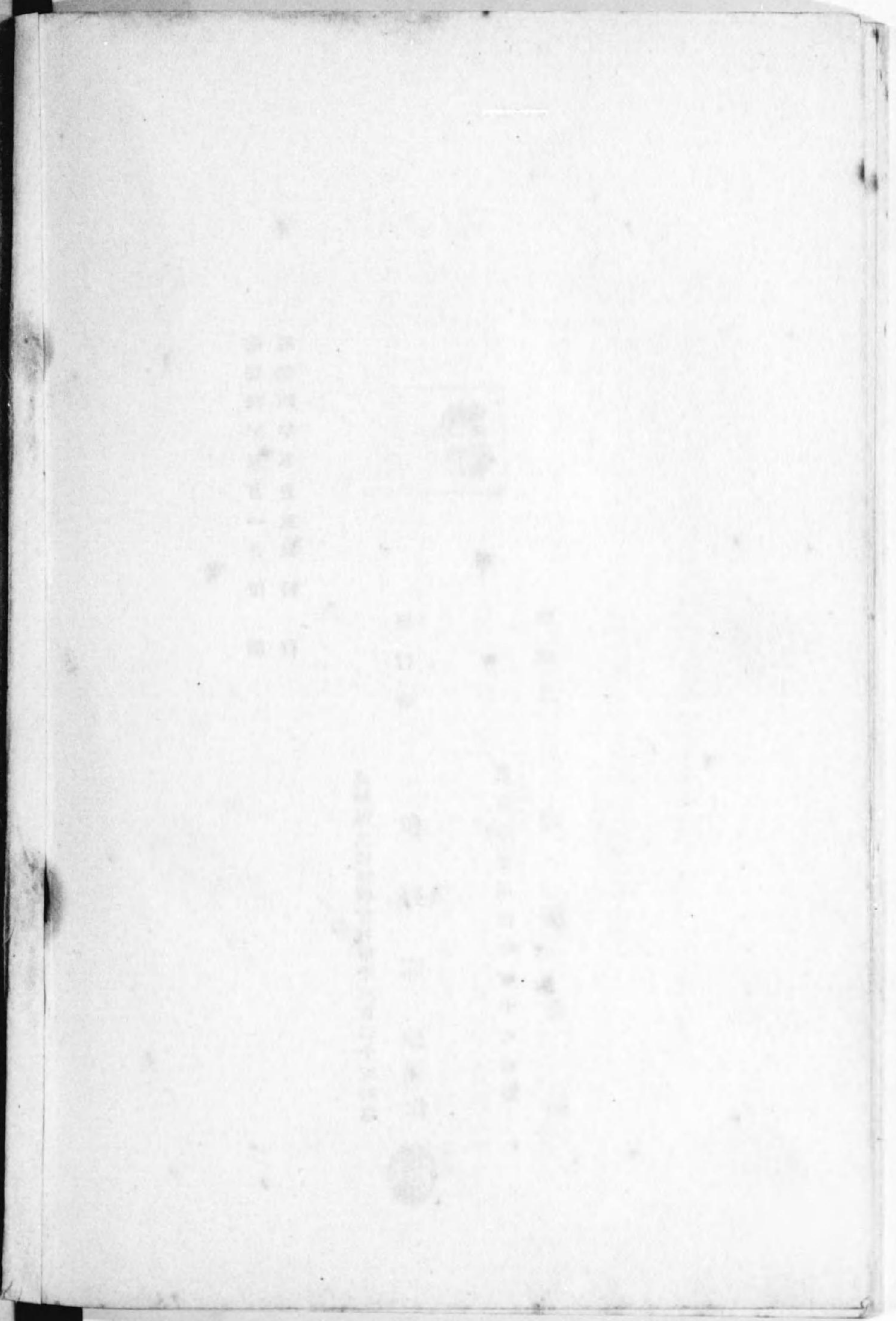
東京市芝區田村町十八番地

印刷者 山縣秀助





165.



終

